



中世の紀行文学

白井忠功著

文化書房博文社

白井忠功 (しらい・ちゅうこう)

1930年(昭和5年)大阪市生まれ

立正大学大学院文学研究科修士課程国文学専攻修了

立正大学文学部教授・日本中世文学・紀行・歌論専攻

『文学遺跡辞典・詩歌編』共著 (東京堂出版)

『文学遺跡辞典・散文編』共著 (東京堂出版)

中世の紀行文学

昭和51年7月15日 第一刷発行

検 印
省 略

著 者 白井 忠功

発行者 鈴木 貞義

発行所 株式会社文化書房博文社

東京都文京区目白台1-9-9

電話 東京 (947) 2034 (代)

振替 東京 86955

郵便番号 112

印刷所 昭和工業写真

製本所 風林社塚越製本

乱丁・落丁本はおとりかえいたします。

©1976 3095-61030-7361

定価は函に表示してあります。

序

記紀万葉をはじめわが国の文学には旅の文学とでも言うべき作品がすくぶる多い。『伊勢物語』や『土佐日記』、さらには『源氏物語』や『更級日記』にもこの傾向は認められる。『伊勢物語』の「東下り」のごときは紀行文学としての最高傑作であると言えるが、それが後の文化に及ぼした影響ははかり知れないものがある。

中世になると交通事情も次第によくなり旅の文学はますます盛んになった。連歌師や遊行の聖^{じぢ}たちは多くのすぐれた作品を生んだ。旅の詩人としての西行の名も広く知られた。庶民の文学とも言うべき説教節にも旅の文学としての性格が色濃く見られる。

近世になって現われた紀行文学の傑作は何といっても芭蕉の『おくのほそ道』である。

歌枕とか道行き文とかいうわが国独特の文学用語があるところから見てもわれわれ日本人と紀行文学との間には切っても切れない関係があるらしい。人生を旅と考えるのも日本人にしみこんだ面白い思考方法であると言えようか。

ともかく、日本人と旅、そして紀行文学との関係を考えることは日本人を知る上にも大事なことのようにである。

この本の著者、白井忠功氏は紀行文学、中でも中世の作品について長年、研究を続けて来られた篤学の士である。中世の紀行文学は、『伊勢物語』と『おくのほそ道』とをつなぐ橋渡しをする役割をになっているとも言つてよからう。中世という時代がそうであるように、この期の紀行文学にはまだまだ分明でないところが多い。

著者がこのような未分野に早くから開拓の鋤を入れての成果をあげているのはたのもしい。しかし、さらに一步を進めてわれわれの前により甘美なみりを示してくれる日の近からんことを期して待つばかりである。

昭和五十一年六月三十日

立正大学文学部教授・竹 下 数 馬

跡は関東各地に残っている。争乱で動揺していた関東を旅する歌人を迎えた人々が、戦陣の最中においても歌会を催している事実は、文化とくに京のそれを享受しようという直向なものに感心してしまふのである。

さらに、禪僧としてあつた正徹が、突如美濃への旅立ちを決行した。「なぐさめ草」の旅である。兎角の噂があつたとはいえ、都を出ることが、我が身を立てることの機会であつたものか。西行の旅と比ぶべくもないが、都の全ての絆を断つての漂泊の思いにかられての旅であつたろう。彼は「西行は一期行脚にてうたをよみし故行道してあんじ」と記している。その思慕の念があつたものか。旅先での文学的営為の数々が、彼の文学を形成している。なかでも、『源氏物語』を論じ、連歌を批判している等々、花やかな中年以後の京での活躍を暗示している様でもある。愛弟子正広も、亡き師正徹の詠草を編纂し、一条兼良の序を乞い、安堵していた折り、知友に誘われて旅立っている。応仁の乱を避け大和長谷の里にあつたという。その地から、はるばる富士一見の旅に出たのであつた。旅の記には、彼の温厚な人柄が随所に散見できる。そして、都の荒廃を嘆き、東国での歌会が曾ての生活を思い出すものがあるというのである。戦いは文化を破壊し、人心を傷つけるものであるということが知られるのである。同じ様に、乱を逃がれて奈良に住んでいた兼良も、美濃の齊藤妙椿の招きに応じて旅に出た。『藤河の記』である。時の貴族の第一人者の兼良も、折りからの戦いには無縁の存在であつた。不幸を託つていたところへ再三の招きであつた。さすがに貴顕の人の旅には、風流の旅に似たものがあつた。各地における詠草・詩歌・知的な様々な叙述が、旅の文学を書き記す行為でもあつた。彼の一編の旅の文学が、高い評価を得ないにしても、それを書き記すということが、文学的な営為であるといえよう。上述してきた旅の文学には、個性的な歌人達の旅情と感懐がある。それらは、それぞれの詠草に見事に結実しているのである。旅における詠歌の考察を試みた『海道記』には、新興都市鎌倉へ旅立っていった京の知識人の魂の揺れ動く様が見られるのである。

旅の文学作品は、例え二流の文学であるという酷評があろうとも、ここには人間の生き方が叙述されているのである。また、自照の精神が記されているのである。その人間の生き方の諸相と自照を旅の記のなかに見出しているというというのが、私の細やかな論考である。これからも中世の紀行文学の作品を読みながら私見を述べていきたいと思っているのである。皆様のご叱声を賜われれば幸いである。

昭和五十一年五月二十五日

高尾山麓 梶田にて記す

はしがき

日本文学における中世の旅の文学を一編毎に、熟読して、私なりの考えを叙述していきたいと思ひながら今日までに至った。ここに収めた旅の文学についての論考は、期せずして、十五世紀、所謂下剋上の時代に当たるものになってしまった。応永期から文明期に亘る歌人達の旅の文学である。

なかでも、足利六代將軍義教の権政そのものであった富士見物の旅は、史上における画期的なものであるといえよう。その旅の様子は、寵臣飛鳥井雅世（富士紀行）・堯孝法印（覽富士記）によって書き著されている。彼等は、將軍の旅に随行して、將軍の栄光を叙しているのであるが、歌人としての旅情の一端をも記していることを見逃してはならない。また、富士見物を歎待した今川範政の筆と伝わる『富士御覽日記』も、駿府での富士賛美と將軍の威光を記した歌日記で、是非一読したいものであった。

一方、京から遠く離れた北陸加賀の国にあった堯孝法印門下の俊秀・堯恵の旅も注目すべきものがある。彼は白山比咩神社の四社の一つ、金剣宮の住僧として、専ら信仰の道に生きていた様であったが、若き頃、堯孝門で活躍していた面影を残している。悩める歌人の姿があった。北陸道を善光寺に参詣し、二十年後に、東常縁の子息を美濃の国郡上に尋ね、その足で北陸道・三国道を辿り関東の地に至る長途の旅を行っている。歌人の旅は、越後の上杉氏、その結縁の人達に歓待された。そして亡き常縁の二男常和を相模の三浦まで尋ねているのである。彼の足

中世の紀行文学目次

序

はしがき

第一編・中世紀行文学論考

一、富士見紀行

「富士御覽日記」考……………四

「富士紀行」と「覽富士記」……………一四

二、堯恵の紀行

「善光寺紀行」管見……………三六

「北国紀行」考察……………五二

三、正徹の紀行

「なぐさめ草」覚え書……………八〇

四、正広の紀行

正広と「正広日記」……………一〇二

五、兼良の紀行

「ふち河の記」考……………一二二

六、紀行の和歌

「海道記」和歌考……………一四〇

第二編・中世紀行文学の作品

一、富士御覽日記……………一六三

二、富士紀行……………一六九

三、覽富士記……………一七九

四、善光寺紀行……………一九三

五、北国紀行……………一九八

六、なぐさめ草……………二〇八

七、正広日記……………二二一

八、ふぢ河の記……………二二八

あとがき

中世紀行文学年表

第一編 中世紀行文學論考

一 富士見紀行

「富士御覧日記」考

1

足利六代將軍義教が富士見物に下向したのは、永享四年（一四三二）九月十日のことである。

普広院義教は^{（注¹）}四代義持の弟で僧籍にあつて青蓮院義田と称していた。ところが兄の歿後還俗して將軍となった人で、その諸政は嚴格そのものであつた。武家は勿論のこと、公家でも門跡でも意に添わぬ者があれば容赦なく罪に当てた。所謂武断政治家であつた。

その義教は、貴族文化のなかで生い立つた人であつたからか、伝統文化には充分なる理解を持ち、公家、僧侶をわが意に従えた。

当時の歌壇は、義教の和歌好尚に左右され、飛鳥井家や二条派の歌人が表立って活躍していた。これは義教の好尚のあらわれであるが、なかでも、永享三年六月には飛鳥井雅世邸に赴いて歌会を行ない、十月には仁和寺境内の堯孝坊を訪れ歌会を行なっているなど、義教らしい一面を知るところである。雅世、堯孝の両者が寵を得ていたともいえよう。

この義教が富士見物に出かける際、自分の気に入つた公家、僧侶などを引き具して行くのは当然のことである。

それらは、「富士御覽日記」(作者未詳)、「富士紀行」(雅世)、「覽富士記」(堯孝)の三部作のなかで管見出来るところである。

ここでは、作者未詳といわれる「富士御覽日記」について考えてみたい。

(注) 1、「中世歌壇史の研究」井上宗雄著一〇三・一〇四頁。

2、「看聞御記」「満濟准后日記」六月二十五日、十月二十五日。続群書類従補遺所収

3、4、5、群書類従卷第三百卅五所収

2

「満濟准后日記」永享四年八月廿九日に、

就富士御下向事。関東安房守内々申入状。返事被仰付赤松幡磨守。其案文一見了。文言少々申意了。

とある記事は、義教富士見物についてのことである。関東上杉の安房守から内々に將軍下向の件についての申し入れ状があつたのか、八月晦日にも次の記事がみられる。

自関東上杉安房守方重注進。今度富士御下向事ニ就テ。関東雜説以外。仍鎌倉殿怖畏間。

5 即ち、將軍下向について重ねての申し入れであるが、鎌倉公方をいたずらに刺激する懸念もあつた。事実義教が鎌

6 倉公方を牽制する目的があつたにしろ、彼の周辺の者のなかには、富士見物を中止するように申す者もいた。

―前略―関東有物言。御下向不可然之由畠山申留。然而□赤松等申勸御下向云々。関東存野心有恐怖事歟。数日之儀枝葉事也。

「看聞御記」九月十日の記事であるが、関東においては物情騒然たることもあり、畠山満家は下向を諫止していることが見られる。ところが義教は、

中空になすなよ富士のゆふけむりたつ名にかえておもふ心を（看聞御記九月二日）

と詠んで、下向を諫止する者達を「面々感嘆申。是程被思食上ハと申て今治定云々」とするのであった。

將軍義教富士見物の下向については此のような経緯があつたが、「自半更天快晴。將軍富士御下向。辰初歟御進発。」（満濟准后日記、九月十日）と快晴に恵まれて出発した。「看聞御記」には、その出発の模様を次のように記している。

十日。晴。此間霖雨屬晴。抑室町殿早旦東国下向。御共飛鳥井中納言。藤宰相入道。三條宰相中將。永豊朝臣。

常光院堯孝。（中略）武家諸大名大略参。

東国下向の供には、飛鳥井雅世をはじめ常光院堯孝ら、義教の気に入りの者や、武家諸大名が多数あったことがわかる。

3

富士見物の紀行三部作のうち、作者未詳の「富士御覽日記」は、巻末に「八旬有余 宗長」と記されている。あかも宗長(柴屋軒宗長)。文安五年一四四八―享祿五年一五三二が作者であるかのように思われている。

荒木良雄博士(注6)は、宗長は作者でなく、ただ書写をしたものであって、「今川記」(史籍集覽本)の終りに、この記と同じ内容があるから、今川範政の手記であるとされるのである。それは、この「富士御覽日記」が今川範政と義教將軍を始め供の人々との和歌の唱和が主で、道中の記事がなく、駿河での事柄が中心であるのは、駿河国府に居た範政が自ら書いたもの間違いがないということである。

雅世、堯孝の二書が、私歌集的な性格を持つのに比べて、この「富士御覽日記」が、義教、範政をはじめ随行者の贈答和歌が集められているばかりでなく、駿府滞在中の三日間の記事であることから、紀行文学と思われないうところがある。即ち、記録的和歌集の性格を持つものであって、將軍義教を歓待した駿府の今川範政の手になるものようである。

(注7)
今川範政は今川了後の兄の孫にあたり、文武両道に勝れており、武家歌人中の古典学者として有名であった。當時は駿河国の守護職の任にあった。

「富士御覽日記」が、前一書と日附がくい違って、あやまりもあり、宗長が「此記。いづこもいづこも。次第ならずみえ候。可レ然本尋出候て。御なほし候て可レ然存候」と巻末に記しているところからも窺われるのである。

宗長が將軍義教の富士見物の盛儀な様について、臨川坊海仕の昔話を書きとめたというのは、同じく巻末の

臨川坊海仕具に物語候し。かたるやうにおぼえ書にて候。只昔のことをくはしく御しり候へば。自他の忠の程をもしろしめすべく候。委細に御知候て。扱御しり候はぬやうに。何事も又大やうにや候べからん。

によってわかるのである。臨川坊海仕、宗長、正広らが文明五年（一四七三）駿河国で逢っているので、その頃聞いたところを晩年に想起してしたためたものであろう。^{（注8）}

如上のことを勘案して、この「富士御覽日記」は、(1)今川範政の手記。(2)範政の手記を宗長が書写。(3)臨川坊の語るところを宗長が書き記す。のいずれかによって成ったものであろう。

（注）6、「中世文学事典」二〇六頁。

7、「中世歌壇史の研究」八八―九四頁に詳しい。

8、「正広日記」正広（応永一九年―一四二一―明治明応四年―一四九五）が、文明五年駿河国に下った時の紀行。そのなかで「中頃臨川坊とて都にてみし人。府中に住待るが。くだる由ききて。せうそこありて。ふしぎなる草庵を結び侍る。又うつの山をもみよかしなどありて。迎をたびたるに思立侍る。」（傍点私）とある。

また、井上豊氏が群書解題、第十一のなかで、「正広日記」「宗長日記」によって、臨川坊、正広、宗長の駿河国での出合いを記されている。